

## 6. 採種林の施業法の改善

- (1) スギ採種林の造成
- (2) アカエゾマツ採種林の造成
- (3) アカマツ採種林の造成

### (1) スギ採種林の造成に関する試験

#### 1. 試験担当者

本場造林部造林科長      柳 沢 聰 雄 ほか

#### 2. 試験目的

採種林の結実量を増大し、タネの品質を向上するための施業方法を確立する。

#### 3. 昭和44年度の経過とえられた結果

予定にしたがって春施肥を行なったほか、各区に環状剥皮処理を行ない、また一部の区では、ジベレリン処理を行なった。44年秋はほとんど球果の着生がみられなかったもので、秋施肥は行なわず、葉分析の試料だけを採取した。なお、44年秋の概査によれば、少なくとも上記の着花促進処理を行なった。44年秋はほとんど球果の着生がみられなかったもので、秋施肥は行なわず、葉分析の試料だけを採取した。なお、44年秋の概査によれば、少なくとも上記の着花促進処理を行なった個体については、45年秋にかなりの収穫が期待できそうである。

従来、この試験のなかで行なっていたアカマツについては、44年10月に第8回の結実調査を行なって終了した。採取球果から調製したタネの品質については45年3月に発芽試験を完了し、現在N・P・Kの含有率を分析中である。

#### 4. 昭和45年度の試験計画

5月中旬に春施肥を行ない、6月下旬～7月中旬にわたって結実促進処理を行なう。

10月中旬には第1回の結実調査を行ない、あわせて秋施肥を実施する。

採種球果は本場にもちかえて測定、タネを調製し、品質を調査する。



## (2) アカエゾマツ採種林の造成

### 1. 試験担当者

北海道支場造林部育種研究室長 鮫 島 博一郎 ほか

### 2. 試験目的

アカエゾマツの種子の入手を容易にし、種子の質的向上をはかるため一般造林地を採種林に導く適切な方法を究明する。

### 3. 昭和44年度の経過とえられた結果

余市営林署古平事業所450林班(古平一級採種林、昭和7年植栽)の余別アカエゾマツ採種林内に約1haの試験地を設定し、強、中、弱度3段階の除間伐を実施するとともに、56本の供試木についてアルミプレート、ハリガネによるまきじめを行なった。

また、除間伐による土壌の変化についての調査を行なった。

さらに施肥の効果についての検討を行なうため、6月上旬、9月下旬の2回にわたって施肥を行なった。

### 4. 昭和45年度の試験計画

1. 試験木の指数的評価法の検討のため、外部形態の調査をおこなう。
2. 評価基準を決めるため、十勝岳山麓のアカエゾマツ天然林の調査を外部形態の変異を主体としておこなう。

## (3) アカマツ採種林の造成

### 1. 試験担当者

本場造林部長	加 藤 善 忠 ほか
〃 造林部種子研究室	浅 川 澄 彦 ほか
〃 土壌部土壌肥料研究室	藤 田 桂 治 ほか

### 2. 試験目的

採種林の結実量を増大し、タネの品質を向上するための、施業方法を確立する。

### 3. 昭和44年度の経過とえられた結果

1.  $N(20Kg)$ 、 $P_2O_5(70Kg)$ 、 $K_2O(20Kg)$ をそれぞれ、尿素、過磷酸石灰、塩化カリで施用——44年5月22～23日

#### 2. 第8回結実調査——44年10月

前回までと同様に、35林班は小班の全調査木から球果を採取。結果量をおさえるとともに、採取球果からだしたタネについて品質を調査した。

44年秋は、43年秋よりさらに不作で、41年の場合と同様に、疎開伐、施肥の効果がほとんどみとめられなかった。37年以來の経過をみると、結実は疎開伐と施肥によって影響されることがたしかであるが、前者の効果は、施肥によってつよめられる。また、施肥によって作柄の低下がかなりいとめられることはたしかであるが、豊凶の波をなくすことはできないようだ。

なお、第8回の結実調査をもって、本試験を終了することとした。

### 4. 昭和45年度の試験計画

本試験は終了したが、他の2項目の終了とともにとりまとめて報告の予定。